

曾我部先生の定年ご退職に際して

法学部長 久保敦彦

一九七二年に本学に赴任された曾我部先生は一九九一年三月、定年ご退職の時を迎えられました。足掛け二〇年間に亘って勤務をされたこととなります。

一口に二〇年と言っても、この間大学は社会一般の動きにつれて大きく変動し、制度的にも各種論議の対象とされてきました。本学もその潮流の中で発展し、規模も新学部、新学科開設を中心に拡大を遂げてきた時期に当たります。法学部はそのような流れの中で従来通り法律学科のみの単科学部としての形態を維持してきましたが学部教員組織は拡充を実現、一時に比べれば一〇名程の増員がなされています。このほか定年、転任などによる退職者の補充人事も当然生じたので、曾我部先生も現職教員の中ではかなり在職期間が長いスタッフとなっておられました。

大学に籍を置く研究者の常として専攻分野、担当講義は各自が一定の範囲を分担するわけですが、学内行政、学部運営などの面では一人一人が受け持ちを変え、また同じ案件に対しても異なった流儀で事にあたることとなります。教授会でも多弁に傾く者の多い——私自身もその一人として自省するところ大なのですが——法学部の中で、曾我部先生はその穏やかなお人柄で過度の動的振幅を押える静の面での中心として存在をお示し下さいました。日頃口数を

多くされる方ではないだけに、時宜を得てのご意見、ご指摘は寸鉄の鋭さを持つものとして心に残ったものです。

このような面にもみ触れると何か気難しさを想像させるかもしれませんが、懇親を旨とする会合などで席を共にする機会を得た者は、先生が自然にその場を楽しまれ、控え目な語り口ながら幅広い話題に参加をされて周りの雰囲気や暖められる方であることに気付いたことでしょう。

学生からも信望を得られ、その要望によって先生のゼミナールは退職後も継続となり、本学部では今年まで引き続きご出講を委嘱させて頂いております。このような場でそれに触れるのは適当ではないかもしれませんが、今春先生のゼミ生の一人が自ら死を選ぶとの事件がありました。先生も極めて驚かれたことでしょうが郷里から来られたご両親をわざわざ大学で迎えられました。突然のご不幸の中で先生との出会いがご家族にいささかなりともお慰めになったことと念じますが、このようなご配慮には学部としても感謝申し上げた次第です。

先生のご経歴、ご業績については別記されていますのでここでは特に言及致しませんが、ご研究は今後もお続けのことと伺っております。常々先生の温顔に接していた私共としては末永いご健勝をお祈りし、また変りないご指導をお願いして御礼に代えさせて頂きたいと存じます。